

# 体育の「学び」を深めるはたらきかけの在り方

## —「気づき」を手がかりに—

吉澤 匠 高度教職開発コース

キーワード：学び，気づき，はたらきかけ

### 1. 研究の背景・研究課題

新学習指導要領(2017)<sup>1)</sup>が示され，主体的・対話的で深い「学び」の実現に向けて意識が高まる中，「学び論」を基盤とした学習と学習指導が目指され<sup>2)</sup>，深い「学び」のイメージをより明確にしていくことが求められている。

佐藤は「学び」を新しい世界(対象・自己・他者)との対話と定義づけている<sup>3)</sup>ように，「学び」は自己の内側で起こることである。とはいえ，技能教科である体育では，外側に見える技能向上をないがしろにすべきではなく，深い「学び」と技能向上が結び付く学習にしていくことは，体育教師の大きな課題とも言える。

私は，外から見える技能向上と内側で起こる「学び」をつなぐ手だてのひとつが，「気づき」を促す教師のはたらきかけであると考えて授業を行ってきた。しかし，まだまだ思うように子どもたちの「学び」を深めるはたらきかけができない自分自身へのもどかしさを感じている。自分自身と体育教師に課せられた課題を解決するために，教師のはたらきかけの在り方について考えていきたい。

### 2. 研究目的・課題解決へのアプローチ

本実践では，「どのようなはたらきかけが学びを深めるのか」について考えていきたい。その際，「気づき」を促す保健体育科の授業を通して，生徒の「学び」がどのようにつながり，その背景には何があったのかを探る。なお，子どもたちの「学び」の具体像として，独立行政法人教職員支援機構の「深い学びのイメージ」(2018)<sup>4)</sup>の7つのピクトグラムを活用することとする。図1～図5で使用しているイラストはこのピクトグラムである。

### 3. 結果・考察

#### 3.1 「動きの意味の気づき」を促すはたらきかけ (球技2年 バドミントン)

運動があまり得意ではないR生だが，バドミントンには興味をも







図1 R生の「学び」の深まり

ち活動していた。「相手か

らの打球を確実に拾ってゲームで勝てるようになりたい」とゲームに夢中になる姿があつ

た。しばらくすると、R生は返球した直後にコートを中心付近の定位置に戻るようになる。その映像を見せ「なぜいつも真ん中に戻るの？」と教師が問いかけると、少し考えた後「その辺に跳んでくるからかな。」と自身の動きを意味づけた。また、その動きがホームポジションという防御技術であることを知ると、「真ん中に戻る」動きはさらに定着した。単元のおわりには、左方に返球傾向のある対戦相手に対して、ホームポジションを「真ん中」ではなく「左」に変える姿を見せた。

夢中になって活動するR生は、ホームポジションへの動きを行うようになった。自分のプレー映像を見て振り返り、ゲームで半無意識的に行っていた自身の動きの意味に気づき、防御の概念をひとつ形づくることができた。また、動きの意味を認識したことが、その動きを活用する姿につながっていった。




### 3.2 「動きの機能の気づき」を促したはたらきかけ（球技2年 サッカー）

運動が得意でサッカー経験のあるT生は、他クラスのチームとのゲームで夢中になって活躍する姿を見せながら、「自分の力とチーム皆の力を



図2 T生の「学び」の深まり

最大限に活用して他クラスに勝ちたい」と、チームの仲間にアドバイスや作戦を提示するようになった。単元第8時では、最初は防御しかなかった(できることが見つからなかった)4人が、4人とも攻撃に参加するようになる。すると、ゴール前の守備が手薄になり、相手チームのキーマン(サッカー経験者)のドリブル突破をT生が必死に止めようとしたが止めきれず、今まで全勝していたチームに初めて負けてしまった。教師が、ゲームで起きた4人に関わる変化について作戦盤を使って説明すると、T生は状況を理解し改善策を考えた。次のゲームに向け、相手チームのキーマンの攻撃を止めるための必要人員について、「Hさんかな。(Hさん一人で大丈夫)Hさんなら早く戻れるしやってくれると思う。」と言い、その後チームの仲間に自分の思いと作戦についての考えを伝えた。後半のゲームではその策が功を奏し逆転勝利した。第9時以降のゲームでは、状況に応じて防御の人数を調整したり、人選を変えたりしてゲームを進めるようになった。

自分と仲間の力を最大限に発揮できる作戦を考えていたT生は、教師のはたらきかけにより仲間の動きの変化がどのようにして相手チームの成功(自チームの失敗)に結びついていったか(動きの機能)に気づいた。そして、相手チームのキーマンを1人で守り苦しかった自分の思いと、仲間への期待を結びつけ新たな作戦を提案した。その後のゲームでも人数の調整や人選の変化を作戦として試行し、新たな攻防の概念が位置づいていた。




### 3.3 「運動感覚の気づき」を促すはたらきかけ（器械運動3年 マット運動）

どの運動や活動に対しても前向きに取り組むS生は、マット運動の授業でも資料を見て運動のポイントや練習方法



図3 S生の「学び」の深まり

を確認し参考にしたり、ペアの仲間と互いの技を iPad で撮影し見合っただけでアドバイスをしあったりする姿を見せた。単元第 5 時では、「伸膝後転で膝を伸ばして立てるようになりたい」と、様々な工夫や努力をしてきたが思うようにいかず、「上手くいかないんですけど、何が違うのか教えてください。」と相談にきた。教師は自分の技をじっと観察させ、教師に続いて同じリズムで立て続けに 2 回その技をなぞらせた。すると、2 回連続で膝を伸ばして立つことができた。できたことを実感した様子で、手をたたいて喜んだ。直後に「できないときと何が違うの？」と問いかけると「脚を速くしたらできる」と脚を振る感覚に気づいた。その後、安定してできるようになり、単元終末の発表でも伸膝後転を成功させた。

ねがいの実現に向け追究する S 生  は、教師のはたらきかけにより、技ができた時の自分の身体を振り返り、運動感覚に気づくことができた。それは、後転の概念として位置づき 、技能習得につながった。


### 3.4 「気づき」を促さないはたらきかけ（球技 2 年 バドミントン）

W 生は、ボール運動に苦手意識があるが、バドミントンの授業では時に歓声を上げ夢中になって活動する姿を見せた。単元第 6 時、時には空振りやネットに掛かることがあるものの、思い切りよくラケットを振り続けていた様子



図 4 W 生の「学び」

から、運動に苦手意識のある W 生だが、「相手コートに速い球を打ち付けて得点したい」というねがいをもっていると感じた。対戦相手(ダブルス)に対して、2 人の間やコート端にシャトルを打込み得点する場面が繰り返し見られたので、その映像を見せ、相手を苦しめていた動き(プレー)を意味づけようとはたらきかけた。しかし、W 生は全く関心を示さず、学習カードにも「こういうのを打つ、と考えると、打ちづらいと思います」と教師のはたらきかけに反論する記述もあった。

夢中でプレーする W 生  の動き(プレー)の変化を見て、「(その時の)W 生なら、たとえなんとなくでも、人の間やコート端を狙って打てば効率的に得点できるようになる」と思い、W 生も変化を意味づけプレーに生かすだろうと考えた。(今振り返ると、考えていたというより、願っていたのかもしれない)。しかし W 生は、自分の動き(プレー)が変化したことは分かったが、その動きに意味をもとうとしなかった。「狙いをつけて打ち込む」ことに意味をもたなかった W 生は、ネット型ゲームの経験が浅い子どもたちがもつ「とにかく落とさない」というねがい(意識)の段階であり、教師の見とりが違っていたと考えられる。

## 4. 結論

### 4.1 子どもが意味を実感するはたらきかけ

本実践では、動きの意味・動きの機能・運動感覚の「気づき」により「学び」が深まっていた。自らの運動を振り返り、できた(成功した)意味・できなかった(失敗した)意味を認識し実感できたときに、子どもたちの「学び」が深まる。

特に、できた場面だけでなくできなかった場面も、「学び」を深めるはたらきかけの機会

になりうる。また、はたらきかけを行なう教師は、単に「認識させる」という意識ではなく、「いつ・どのようにはたらきかければ実感するか」を常に思考すべきである。

#### 4.2 子どものねがいに沿ったはたらきかけ

子どものねがいに沿ったはたらきかけが、子どもたちの「気づき」につながり、「学び」の深まりにつながる。特に、教師のはたらきかけが子どものねがいとずれた時、「学び」は深まらない。3.4 バドミントンの実践(W 生の姿から)では、「攻撃にも目を向けてほしい」という教師の強いねがいからW生のねがいを見とることができず、W 生にとって意味のないはたらきかけとなってしまっていた。教師は、自身もねがいをもちつつ、子どもたちのねがいをしっかり掴み、その子のねがいに沿ったはたらきかけを行うことが重要である。

### 5. 研究の成果

#### 5.1 体育の「学び」の深まりの具体化

私は、この実践研究を通して、今まで漠然としていた自己の内側の「学び」と外側に見える技能向上(できる)とのつながりを捉え、体育の「学び」の深まりを具体化することができた(図 5)。授業では、できる、わかる、捉えこむそれぞれの「学び」が、何らかのはたらきかけにより不規則かつ連続的に立ち起こっている。(妥当性については今後も検討が必要であることを踏まえつつ、体育の「学び」の理解が半歩進んだことを伝える意味で掲載する)

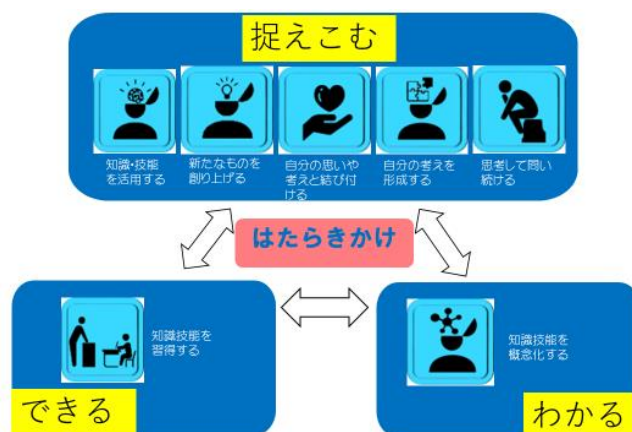


図 5 体育における「学び」の深まり

あることを踏まえつつ、体育の「学び」の理解が半歩進んだことを伝える意味で掲載する)

#### 5.2 視座の変化を促す「気づき」

これまで、思うように「気づき」が促されずもどかしさを感じてきた原因は、私のはたらきかけがその子のねがいではなく、私のねがいに向けたものになっていたことに気づいた。また、「気づき」に視点をあてた実践研究を進めるうちに、子どもたちのねがいを掴み、その子のねがいに自分のねがいを重ね、支援しようとしている自分に気づいた。「気づき」を視点にした授業づくりは、教師の視座の変化を促し子ども中心の授業観につながる。

### 文 献

- 1)文部科学省：中学校学習指導要領(2017)
- 2)岡野昇・佐藤学：小学校体育 12 ヶ月の学びのデザイン(2019), pp.9-15
- 3)佐藤学：学校を改革する(2012), p.25
- 4)独立行政法人教職員支援機構。資質・能力の育成を目指す 主体的・対話的で深い学びのイメージ。 <https://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/pictogram.html>